

② 288あたりではA7のひょうせい
構成

3,604 $\frac{1}{4}$

加算! まもる ③ 3910^P

四天王寺
④ 2475 $\frac{1}{2}$ $\frac{3}{2}$
⑤ 3575 $\frac{1}{5}$
⑥ 3992 $\frac{1}{5}$ ⑦ 288 $\frac{1}{5}$

第七十章 推古朝の寺院・仏像

法興寺 四天王寺 引き継

推古朝には多数の寺院が創建さるることにな

が次々と

その水ではこの水以後、政治面の推移を後回し
にして、予め、この当時の主要な寺院・

仏像等について見ておくことにしよう。

なお、図からかなりややこしいことを述

巻頭の

べるので、第10表を参照しながら読み進ん
でいただきたい。

推古朝の前後とろ、実に数多くの寺

が建立された。

なお、寺院の平面構想については、第44回へ伽藍

配置比較図を参照いただきたい。

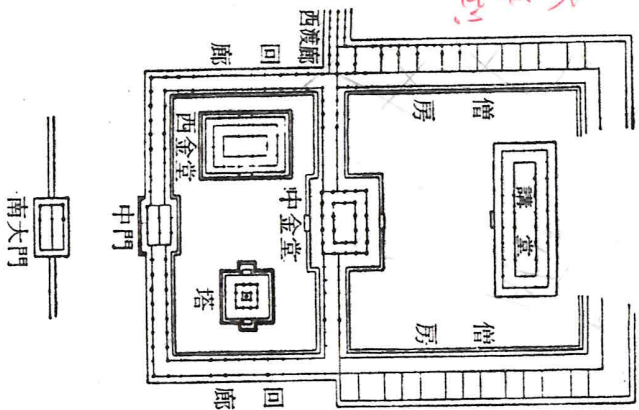
(*)

ヒ-ス17下511.
ゴ4m7

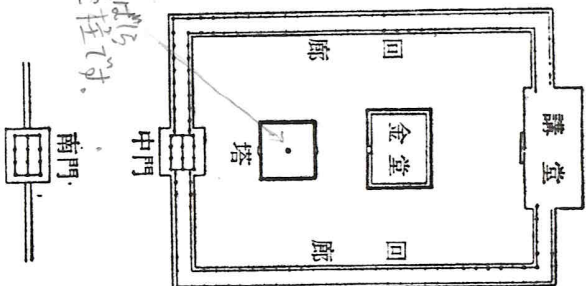
・1頁に掲載
大正

文房
おし大
さなゴ4
ヒ17下511

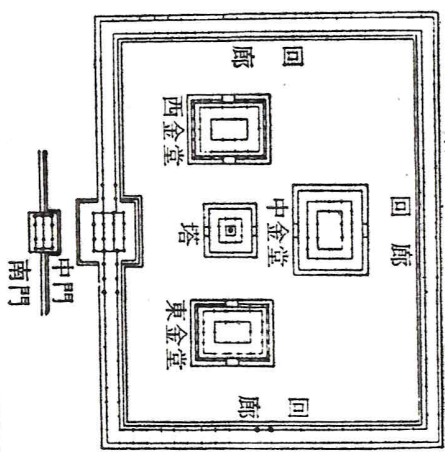
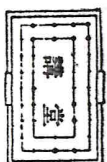
川原寺



寺
四天王



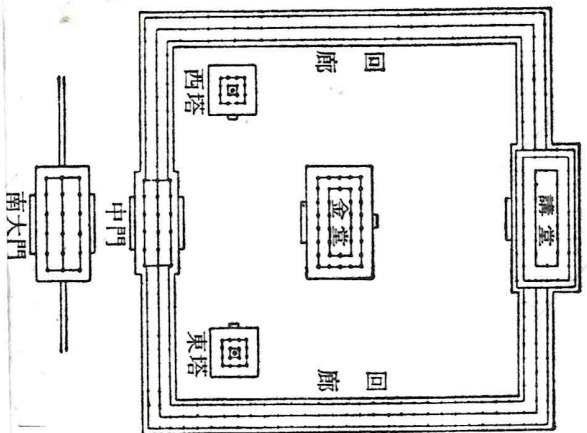
飛鳥寺



3,604-2/4

<セボある

下り3 薬師寺

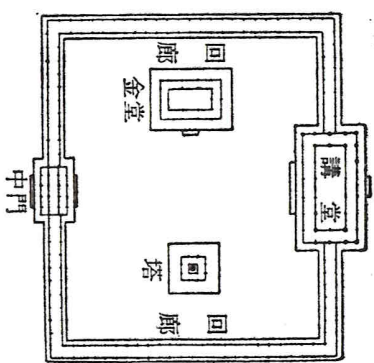
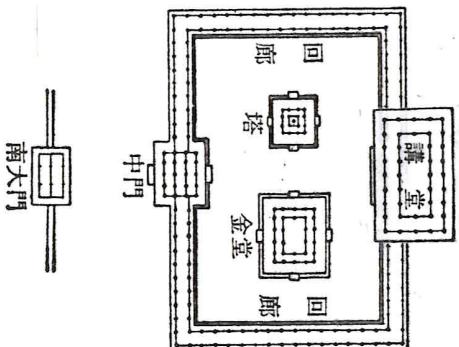


下り3

〔当和の30〕
法隆寺

西院

観世音寺



0 10 20 30 50 100 m
0 50 100 200 300 尺

1406
第442図

伽藍配置比較図—奈良国立文化財研究所『川原寺発掘調査報告』より

1306

『飛鳥』

かどあきこ
門脇 二

日本放送出版協会、昭和45年12月1日(第2刷)発行、214頁。

1306

『法隆寺』

新井和臣、近畿観光会、昭和16年9月5日発行、21頁<法隆寺式>参照。

83618-2/3
836191

83682-1/3

88

をばりだのめ
小野田
紀F180?

上原和51P
藤原(山)13P

⑤3886P 原文
⑥3647P 同又
3649P

3,604P-3/4

『小野小町』
74頁~76頁を
見ていただきたく存じます
3,604P-3/4

西の口法隆寺(本尊、葉師如来像)
東の口斑鳩寺(本尊、釈迦三尊像)

推古四年(五九六)十一月に口法興寺が
大倭国(肥後国)に完成してから二年後の推古六年
(五九八)四月十五日、東の口日辺日
本国口の等与刀弥々大王は、いままた西の
口大倭国(肥後国)の都へと上洛しておられ
た。

推古天皇に請わねて勝鬘経を講じられる等
与刀弥々大王のお姿には、まるで僧のような
威光があつた。

口法王帝説にこう記されている。
戊午年(推古六年、西暦五九八年)四月

十五日、少治田天皇(推古天皇)、上宮王を
請せて勝鬘経を講かした。其の儀僧の如し。

諸王公主及び臣連公民信受て嘉はざるなし。
三箇日のうちに説き訖りぬ。天皇、聖王に播

磨国攝保郡佐勢地五十万代を布施したまひき。

ルビ藤原の13

再建20^p 上原和

是非 1253^p 598
586
427 OK 12

3,604^p 4/4

いせ 1942^p
布施 人、信にほどとめぐむこ
その金銭 または品物

聖王、即ち此地を以て法隆寺の地と爲したま
き。今播磨にある田三百余町なり
とある。(「聖徳太子」上原和、講談社、五
一頁参照)

米

等与刀弥々大王は、
経王を建講した折に布施として推古天皇から
賜わった播磨国の水田三百余町を、

「一体、どのような使途に用いるべきであ

ろうかし

と熟慮されたい。

そして思案の末、等与刀弥々大王は、

八父用明天皇(丙午年)用明元年、五八

六年に誓願された寺に仏像(薬師如来像)

を、是非、造ってさしあげたい。

とお考えになつた。

すなわち、日推古六年(五九八)

等与刀弥々大王は、父用明上皇念願の

374
85

釈迦三尊像(市) 3661P-1/2 (全ルロ付主)

③ 3614
③ 3894 同文

3,605P-1/3

藤原(上) 471*

史料に83日本の歩み59
(返り無主) ③ 3606 同文

せん 小林1009*

銅 ③ 3661-1/2 同文

やまひ

病 2229*

③ 3614-1/2

同文

寺曰法隆寺の造営を思い立たれたのであろう。

法隆寺金堂に安置され、日葉師如来像

の光背銘は、そのようないきさつを述べてい

るように解される。

葉師如来像光背裏面鐫銘の全文は、次の通

りである。

「也迎大宮治天下天皇 大御身勞賜時、歳

次丙午年、召於大王天皇与太子而誓願賜、

我大御病太平、欲坐故、将造寺葉師像作仕奉

詔。然当時崩賜、造不堪者。小治田大宮治

天下大王天皇 及東宮聖王 大命受賜而歳次

丁卯年仕奉ル (推古天皇) (聖徳太子) 下

とある。(「聖徳太子傳」上) 藤原猶雪、臨川

書店、四七一頁。「史料」による日本の歩みし

古代編、見玉幸多、吉川弘文館、五九頁参照)

(*)

この葉師如来光背銘は、普通一般には、

池辺の大宮に天の下し、(う)めし天白王

13. 8 am

従来 3606
7/4 5/5

3,605^P-³/₃

3894^P 所因 83^P 3537^P

(用明天皇)、大御身いたずき賜いし時、歳
は丙午にやどりし年(用明元年、五八六年)
大王天皇(推古天皇)と太子とを召いて誓願
賜わく、我が大御病を太平主なんと欲し坐
す。故、寺を造り薬師の像を作り仕え奉らん
とすと詔りたまいき。然れども、当時崩り賜
いて造り堪えざれば、小治田の大宮に天の下
らしめし大王天皇(推古天皇)と東宮聖
王、大命を受け賜りて、歳は丁卯に次りし年
(推古十五年、六〇七年)に仕奉りき

と理解されてゐる。(「法隆寺」町田甲一、
時事通信社、八三頁参照)

つまり、通常、
①用明天皇は、用明元年、自らの病気の
おりに誓願して、
「我、大御病を太平主なんと欲し坐すが故
に、寺を造り薬師の像を作り、仕え奉らんと
す」と詔された。

②推古天皇と聖徳太子とは、大命を受け賜わ

って、推古十五年に（寺と薬師の像を完成し）
 仕え奉った、
 と解釈されている。
 ・かし、
 (1) 御自身の病気の平癒を祈願するとき、
 「我大御病を大平ぎな人と欲し坐すか故に
 云々」
 などと言うものなのだろうか、少々奇異に
 思われる。
 (2) いかも、御自身は病を得て臥せっておいで
 だろうと思われるのに、用明天皇が、
 「我が大御病を大平ぎな人と欲し坐すか故
 に、寺を造り薬師の像を作り、自ら仕え奉
 らんとす」
 と詔されたとは考えにくい。
 (3) また、用明天皇が崩御された後に、
 八推古天皇と聖徳太子とは、一体、誰から
 大命を受け賜わられたのであろうか、
 と疑問に思われる。
 (4) さらに、

(ニ) 食の量 611' 紀下158'

12.5
OM
用明元年(五八六)でなく
て翌年の

同文 3615^P-1/4

この頁右折

原文 3605^P-1/3

3,606^P-2/3

3655^P
3894^P

3537^P

3605^P-1/3 版

● ↑↑↑↑先^{さき}に述^のべた^とよう^{あり}に、
へ欽明上皇^{きんめいじょうこう}は、崇峻三年^{すけりねのとし}（五九〇）、八十
一歳の時に薨去^{こうきょ}されたのであろう。
と拝察^{はいさつ}される。（第六十八章へ欽明上皇の薨
去^{こうきょ}の項において既述^{すで}。第一表^{だいいつひょう} 卷末の^{まづ}保寿表^{ほじうひょう}参照^{さうじょう}）
この物語では、日葉師如来^{にふしにょらい}像^{ざう}光背銘^{こうはいめい}に、
次のように解釈^{かいしゃく}した。
（用明天皇^{ようめいてんわう}）、大御身^{おほみみ}（大身^{たいしん}は身分^{みぶん}の^{たか}高い人^{ひと}）
欽明上皇^{きんめいじょうこう}のことなのであろう。いたずき賜^{たま}い
し時^{とき}、歳^{とし}は丙午^{ひのえうま}にやどり一年^{いねん}（用明元年^{ようめいげん}、五
八六年^{みっしやうねん}）、大王^{おほきみ}天皇^{てんわう}（推古天皇^{すいこてんわう}）と太子^{みこ}とを
召^よして、^{おほきみのすめうみこと}仏神^{ぶつじん}に^{せいかん}誓願^{せいかん}し賜^{たま}わく。
日^ひ我^{われ}く父^{ちち}欽明上皇^{きんめいじょうこう}の^{おほみみやまひ}大御病^{おほみみやまひ}を太平^{たいへい}ぎな
んと欲^ほし坐^ます。故^{ゆゑ}、寺^{てら}を造^{つく}り、葉師^{にふし}の像^{ざう}を作^{つく}
り、^{おほみみやまひ}仏^{ぶつ}および欽明上皇^{きんめいじょうこう}に^{おほみみやまひ}仕^{つか}え奉^{たてまつ}らんと
す。
と詔^{みこと}したまひき。然^{しか}れども、当時^{そのとき}（崇峻三年^{すけりねのとし}）
五九〇年^{ごきやうねん}、用明上皇^{ようめいじょうこう}の父^{ちち}欽明上皇^{きんめいじょうこう}が崩^{くずれ}り賜^{たま}
いて造^{つく}り堪^あえざれば、小治田^{せうぢでん}の大宮^{おほみや}に天^{あめ}の下^{した}

前巻のようど
次頁 65

3605^P
-1/3 65

薬師如来像の額内 ③3580^{3/5}
③3613⁰ 3614⁰ ③3605^{1/3} 125

3,606^{P-3/3}

「於」史料に83日時のをみ 245^P T389
③3580^{3/5} ③3614⁰

③3605^{1/3} -1/3
③3617^{1/4} 同文
③3603^{1/2} 125

一、~~さ~~一、~~め~~一、大王天皇（推古天皇）と東宮聖
王は、~~ひのう~~用明上皇の、大命を受け賜りて、歳
は丁卯に次りし年（推古十五年、六〇七年）
に仕え奉りき、
という意味なので、
な、前記のように、
推古十二年（六〇四）正月一日条に、
始賜冠位於諸臣、各有差」と記されている。
↑↑この頃、等子刀弥々大王は、天皇位を
返上して、推古天皇の口一朝の世を實現さ
れ、自ら太子の位にお即主になったのである。
う、
と推察される。第六十九章へ天皇の着衣を
身につける聖徳太子像の項において既述
●恐らく、法隆寺の薬師如来像が作られた推
古十五年（六〇七）当時、聖徳太子は、
「東宮聖王」
などと呼ばれておられたのであろう、と解さ
れる。
●もつとも、推古十五年（六〇七）、大倭国

3,607^P - 1/2
3,606^P - 4/4

④3947^P
1

④3828^P
427708タイロ

④3827^P - 1/2

(肥後国)に日法隆寺に日薬師如来像に完
成した頃、

△すでに、日天皇Bという称号が用いら

ていたのだろうか✓

という問題が存在する

ついては、追って考察したい。(第七十三章

△日本国に日天皇に✓第七十四章へ倭

王と爲すを悪む等の項において述べたい)

※

および

加版5行
完工

1. 建設 2000年頃 18年
 2. 建設 16年 18年
 3. 建設 16年 18年
 4. 建設 16年 18年
 5. 建設 16年 18年
 6. 建設 16年 18年
 7. 建設 16年 18年
 8. 建設 16年 18年
 9. 建設 16年 18年
 10. 建設 16年 18年
 11. 建設 16年 18年
 12. 建設 16年 18年
 13. 建設 16年 18年
 14. 建設 16年 18年
 15. 建設 16年 18年
 16. 建設 16年 18年
 17. 建設 16年 18年
 18. 建設 16年 18年
 19. 建設 16年 18年
 20. 建設 16年 18年
 21. 建設 16年 18年
 22. 建設 16年 18年
 23. 建設 16年 18年
 24. 建設 16年 18年
 25. 建設 16年 18年
 26. 建設 16年 18年
 27. 建設 16年 18年
 28. 建設 16年 18年
 29. 建設 16年 18年
 30. 建設 16年 18年
 31. 建設 16年 18年
 32. 建設 16年 18年
 33. 建設 16年 18年
 34. 建設 16年 18年
 35. 建設 16年 18年
 36. 建設 16年 18年
 37. 建設 16年 18年
 38. 建設 16年 18年
 39. 建設 16年 18年
 40. 建設 16年 18年
 41. 建設 16年 18年
 42. 建設 16年 18年
 43. 建設 16年 18年
 44. 建設 16年 18年
 45. 建設 16年 18年
 46. 建設 16年 18年
 47. 建設 16年 18年
 48. 建設 16年 18年
 49. 建設 16年 18年
 50. 建設 16年 18年
 51. 建設 16年 18年
 52. 建設 16年 18年
 53. 建設 16年 18年
 54. 建設 16年 18年
 55. 建設 16年 18年
 56. 建設 16年 18年
 57. 建設 16年 18年
 58. 建設 16年 18年
 59. 建設 16年 18年
 60. 建設 16年 18年
 61. 建設 16年 18年
 62. 建設 16年 18年
 63. 建設 16年 18年
 64. 建設 16年 18年
 65. 建設 16年 18年
 66. 建設 16年 18年
 67. 建設 16年 18年
 68. 建設 16年 18年
 69. 建設 16年 18年
 70. 建設 16年 18年
 71. 建設 16年 18年
 72. 建設 16年 18年
 73. 建設 16年 18年
 74. 建設 16年 18年
 75. 建設 16年 18年
 76. 建設 16年 18年
 77. 建設 16年 18年
 78. 建設 16年 18年
 79. 建設 16年 18年
 80. 建設 16年 18年
 81. 建設 16年 18年
 82. 建設 16年 18年
 83. 建設 16年 18年
 84. 建設 16年 18年
 85. 建設 16年 18年
 86. 建設 16年 18年
 87. 建設 16年 18年
 88. 建設 16年 18年
 89. 建設 16年 18年
 90. 建設 16年 18年
 91. 建設 16年 18年
 92. 建設 16年 18年
 93. 建設 16年 18年
 94. 建設 16年 18年
 95. 建設 16年 18年
 96. 建設 16年 18年
 97. 建設 16年 18年
 98. 建設 16年 18年
 99. 建設 16年 18年
 100. 建設 16年 18年

ともあれ、用明天皇の誓願が成就するよう
 に願って、西の大倭国（肥後国）に法隆寺
 が造営されることになったのであろう。
 推古十五年（六〇七）に完工したものと
 推定される。葉師如来像光背銘参照。既述。
 とはいえ、止むを得ない事情があつて
 八天上国のこの日法隆寺は、後年の
 天智九年（六七〇）四月三十日の夜半
 後に涙を飲んで、茶毘に付されたのであ
 ろう。

と想到される。
 卷頭の第10表 第448回 天智九年法隆寺
 天智九年四月三十日条に、
 天智九年四月三十日の夜半、
 法隆寺に災けり。一屋も餘ること無し。
 大雨ふり雷震る。と記されている。

この物語では、
 推古十五年（六〇七）に造営されてから
 六十余年を経た天智九年（六七〇）四月三十
 日の夜半、
 本尊の葉師如来像および主要な

寺と仏像を作りたいという望み

品々がすでに運び出されて、すっかりカラ
ドウとなつてしまっている。日法隆寺の全ての堂
塔に、次々と火が放たれ、こうして「
大倭国（肥後国）の日法隆寺は一屋も余さず炎上
したのであろう」と考えてみたい。
（＊）
それは、この日法隆寺は、大倭国（肥
後国）のどの地に造営されたのであろうか。
それは、分らない。
「松尾山（三一六メートル）を主峰とする山丘の南麓で生駒郡班鳩
だが、——いて言えは、
へあるいは、大和国の泊瀬川北岸、
山に南麓の日班鳩に地形的に相当する所、
——肥後国の白川北岸、龍田山
たり、用明上皇の仏寺としての日法隆寺ら
が建立されたのかも知れない。
と想像される。（第8巻二八頁を参照）
（二五二メートル）の
参考ながら、
①西流する白川の北岸、龍田山の南麓に位置
する熊本市黒髪町宇留毛の丘陵地の地中には

H28(2016)8、15 ⑥お盆の日
小林 184

(ニ)

①3608-1/4 考え

すいぶん
随分 1176
たいそう

3608-2/4

布目瓦 1/4
日本瓦(2) 157

主部
規模 547

すいぶん
随分 1176
たいそう

たくさん
沢山 1363

鎌倉以前の瓦に多い。

おびただしい赤い布目瓦(焼けた瓦)が埋ま
つていいる。
穴や溝を掘り進むと、次から次へと沢山出
てくる。
・桜山中学校建設に先立ち、丘陵地を削って
の大規模な整地が行なわれた際には、大小無
数の赤い布目瓦の破片が散乱していた。
②また、同中学校の南に接した旧我家の門脇
からは、高さ二〇センチほどの手足の一部の欠け
た金属製の小仏像が出土した。
(手足の一部欠損。井仏か)
これらが、口法隆寺と何らかのかかわり
が有るのか否かについては全く定かでないが
随分古い時代に、瓦屋根の建物が炎上した
うである。と推測される。
なお、老齢となった父がその小仏像を預けて
いたところ、この寺が台風によって倒壊し、この際、多
くのものが行方不明になったようである。
・散乱していた部材等とともにどこかへ搬
送されてしまったのだろう。(詳しいこと
は分からない)

⑦ 3703^D 2 1/2
 ⑦ 3704^D 2 1/2
 小册 85P
 42770K
 ⑦ 3713

$\text{Vibrot } 85^\circ$
 $927/106$
 $\text{③ } 37/3$ $\text{④ } 37/4$ $\text{⑤ } 37/3 \sim 4$

3. 608^P - 4/4

町田 197^p はちの巻67^s
 藤原 上61^p 蜂園年
 ④3580^p - 3/4

かはち
川内 ㊥3474^p-73 東行 太子の墓。
㊥3704^p 同文 「小町」㊤11

闕記 予め述べるにと、日上宮聖徳太子伝補

入師率衆人令造葛野蜂岡寺、令造川内高井
 斑鳩寺被災之後、衆人不得定寺地。故百

寺
13.5 AM
斑鳩寺被災の後、衆人寺地を定め得なか
云々
いかるがでらなさい
多くの人の世間の人々

ったので、百済の入師は衆人を率いて、
 葛野の蜂岡寺（現在の京都の広隆寺）と川内の高
 井寺を造らうめ、云々
 の前身の寺

と記されている。(「法隆寺町田中、時事通信社、一九七頁参照」)

●なお、大和国の斑鳩寺が焼失して、その後、寺地が~~金~~らなくなっていました、など

とは考えにくい。ようには思われる。
 ●補闕記
 寺のことはなく、大倭国(肥後国)の斑鳩寺は、大和国の斑鳩寺に
 いう。斑鳩寺は、大和国の斑鳩寺に
 いう。斑鳩寺は、大和国の斑鳩寺に

● おそろく、
大倭国の
法隆寺に
を炎上させた後、
隆寺に
あそこを指して
いるのであろう。
のち

一帯の地勢をすっかり様子が違うまでに変え
 その証拠を残さない為焼け跡あたり
 であらう、と想像される。

詳しとは、第七十章へ薬師如来像と釈迦三尊像の製作年代について、の項において述べた。

「この物語について」次頁
「考えに」前頁12行
3,609P

3671P
3654P

42770P
「小野小町」81P
「とこで」3616-3/5
3654-3/3 中矢
3670P

とあもなく、日法隆寺と日斑鳩寺とが混在
■「この物語」の説に従い、寺伝が主張する日非
再建論の説に従い、
へ現在の天智九年に斑鳩寺(現法隆寺)は、天
智九年以後に再建されたものではあるまい
と考えて話を進めてゆきたい。
■なお、日本書紀には、時として日法隆寺
時として日斑鳩寺と記載されており、気ま
まに書き綴られているような印象を受ける。
■しかし、一つの書、日本書紀の中に、とり
とあもなく、日法隆寺と日斑鳩寺とが混在

とこで、大和国の日斑鳩寺(現法隆寺)
の寺伝では、五九三(六二八)
「推古朝の創建以来、この伽藍は一度の火
災にも会わずして今日に至っている」
という。「法隆寺」新井和臣、近畿観光会、
五頁。「聖徳太子」上原和、講談社、二〇頁。行参照
■すなわち、寺伝は、
水子説、いわゆる、
「法隆寺は、天智九年に焼失し、その後(天
智朝以降)に再建された」
とする説を否定しているわけである。

sec! ⑤288¹/₂
⑤3612¹/₂

ニヒ 「小町」クク下1行の小さな字部は、二頁以後においてハル。
同文 ⑤286-2/6 には「小町」クク下1行の小さな字部は、二頁以後においてハル。
3,610¹/₂ 太文字 ニヒ ⑤3608¹/₄ 同文 小町 クク上

して、いゝと、いゝこと自体がおかしい。
■ 日本書紀の編纂者は、法隆寺と斑鳩寺
寺とを書き分けたものと思われ。法隆寺と斑鳩寺
■ 日本書紀に記されてゐる法隆寺、
おおよそ斑鳩寺（当初の斑鳩寺である若草
伽藍）について、この物語において、
□ 法隆寺は、大倭国（肥後国龍田山）一
五ニ（南麓あたり）に建立された。
□ 当初の斑鳩寺（若草伽藍）は、大和国
松尾山（三一六）を主峰とする山丘の南
麓、生駒郡斑鳩町に建立された、
と解し、區別してゆくことにした。（荒筋
の第三編へ日本書紀の記載における約束事）
の項において既述）
※ 日本書紀以外（以外）の書については、
この限りでない。

*

よく知られているとあり

町田 64P

町田 82P

3.611P - 1/2

3665P

町田 92P

天つぎ
3691P
3665P

大和国の斑鳩寺（現法隆寺）の現在の
の本尊は、金堂の中央に安置されてゐる。釈
迦三尊像である。（「法隆寺」町田甲一、
時事通信社、六四頁、他参照）

ところが寺伝では、
「法隆寺のそもそもの本尊は、金堂内の東
の間に安置されてゐる。日葉師如来像であ
た」という。（「法隆寺」町田甲一、時事通信社
ハ二頁参照）

観察するところ、
①肥後国に建立された「法隆寺」のそもそ
の本尊は、日葉師如来像である。（当初の
（若草伽藍）

一方、大和国に創建された「斑鳩寺」の本
尊は、日葉師如来像である。（大和国（肥後国）の

隆寺炎上後に先だつて搬出された。日葉師如
来像は、大和国「斑鳩寺」（現法隆寺）の
金堂内へ運び込まれ、再建された。安置され
た。

釈迦三尊像の東隣りに安置された。

ということなのだろうか、と思われれる。写真図版
法隆寺金堂内陣参照

$$3607^p - 2/2 \quad (2x) \quad 3.611^p - 2/2$$

張隆寺の神主の本姓は葉部、由来前頁の3611-1/26~17
 聖徳太子 婚雪 3691-4/6 塔のある八景 上野隆
 168P 221P

コクヨ ケー20 20×20

$$\textcircled{*} 3608^{n-1/4} 1659$$

607 寺と像と町田82P
-586 3605-3/3 3605 銘文・説文 3,612P

こ

この寺は、曰法隆寺とも、曰斑鳩寺とも称されるようになったように推察される。
『日本書紀』の記載におけるかぐつたの東寺【法隆寺】と【斑鳩寺】
において既述

だが、現在の段階で

とはいえ現実には、そんな単純に割り切

って考えることは出来ない。追々述べ

てゆことになった。

■先ず、曰薬師如来像の下の推古十五年当時

に作られたか否かについて一般的な見解を

見てみよう。

●曰薬師如来像の宝珠形の頭光の裏に、先に述べたような銘文が刻まれており、従来は大略

「用明元年（五八六）天皇（池辺大

宮に天下治めす天皇、用明天皇）が、大御身

（御自身）の病氣平癒を祈って寺と共にこの

像を発願され、二十一年後の丁卯の年にあ

る推古十五年（六〇七）に完成した

と読まれてきた。

●古くからある法隆寺の推古十五年草創説は①

こ

3605-1/3
1259

3605-1/3
1159

3.613^P

大カン 598
小カン 1951
町田 85²

623
607
16

と断言するまでも出来ないようだ

■ いかしながら、
華師如来像は、推古十五年

町田甲一、時事通信社、八二〇八七頁参照

③ さらに、まだ若い聖徳太子を聖王と呼ぶのはおかしいという意見もある。(「法隆寺」

と銘するのはいかしく、というのである。

つまり、推古天皇のことを、その在世中に

の宮号をもつて呼ばれるのはおかしいと考える人が、なお少くない。

ゆえにただうと考える人が多くなっている。

② 今日、天皇という語は、推古朝に使

十六年も古いものとは考えられなとする人

① 華師如来像の様式が、釈迦三尊像の様式より

この銘文を根拠として言われているのである。

45.1.13 水 ⑥
③ 3605 1/1 所

新刊 24 下 ⑤ 3665⁷, 3611⁷
③ 3665⁷ 同 反 24 下 本 寺 の本 寺

3,614⁷ - 1/4

③ 3605⁷ 原 文 ③ 3606⁷ 2/2 末
推古 15 年 607 年 34 年
太 34 57 4 33

町田 99⁷

天 7 3 改 行 改 行

① 後述する（とあり）薬師如来像の目・鼻・唇
などに、釈迦三尊像より古い様式がみられる
という。（法隆寺「町田甲」・時事通信社「九九頁参照」）
② 存命の天皇が在位中に宮号で呼ばれること
がなかったと証明するのも困難であろう
③ 等与刀弥々大王は、推古十二年（六〇四）
頃、自ら退位して太子となられた後、日東宮
聖王と呼ばれる敬われておられたのかも知
れない
＊
■ なお、法隆寺のそもの本尊である
と寺伝加いう日薬師如来像について、茨田
耕作氏は、
「釈迦三尊像と同様式をもっているの
で、同じく止利佛師の作であろう」とい
う。このことについては、追って詳述したい
■ また、先に述べたように、
推古六年（五九八）に、等与刀弥々大王

華師 野田 97 (甲 84) 優 1. 2218^P 3615-5/7 3, 614^P-2/4 光背銘 ④ 3605^P-1/3 末 25^P ④ 3605^P 15^P ④ 3604^P-1/4 末 5^P 13^P

は 法隆寺 の 造営 を 思 い 立 た れ た
 と 拝 察 さ れ る (卷 頭 の 第 10 表 で 第 七 十 章 十 八 西 の
 法 隆 寺 の 東 の 斑 鳩 寺 の 項 の 冒 頭 に
 お い て 記 載 の 法 王 帝 説 末 尾 参 照)
 止 利 佛 師 (鞍 作 鳥) は 法 隆 寺 の 本 尊 と
 な る 葉 師 如 來 像 を 推 古 六 年 (五 九 八)
 頃 作 り 始 め て 一 一 一 七 年 後 の 推 古 十 三
 年 (六 〇 五) 頃 に は ず だ 光 背 銘 部 分 を 除 い て
 ほ ぼ 完 成 し て い た の だ ろ う (卷 頭 の 第 10 表 参 照)
 何 ら か の 理 由 に よ り 未
 た だ 法 隆 寺 の 金 堂 や 五 重 塔 な ど が
 と 想 象 さ れ る 葉 師 如 來 像 の 造 営
 葉 師 如 來 像 の 出 来 は 見 事 な も の だ
 美 し く 優 し く て 慈 愛 に 満 ち た 仏 様 で
 あ っ た (田 真 匠 氏 著 636 葉 師 如 來 坐 像 参 照)
 こ う し て 止 利 佛 師 の 技 術 は 大 評 判 に
 な っ た だ

*

④ 3613^P 11^P 卷 頭 の 造 営
 二 十 八 章 に 建 立 多 少

④ 3605^P 15^P

台座の形

・カウ
・右側の全面に
大々々掲載
下さハ。

3614^p-3/4

3614^p-1/2

カマ



3668^p-2/2 111 3614^p-3/4

1304

1404

名宝日本の美術『法隆寺』大西修也 小笠原 1990年10月旧発行 又1頁参照

36896^p-2/2 111

H30(2018)9.16(回)~9.17(4回)
 H31(2019)3.28(木)~3.28(3回)
 令和3(2021)1.16(土)~1.18(4回)

3,614^P-4/4

きかみ 祈願
 と理解される(既述)
 たいん 本願 3606^{1/4} } 14行
 かほみ 大御身 " 3605^{1/3}

18 1/8
 1/7

あろう、と理解される。(既述)

な お、
 「薬師如来は」衆生の病苦を救い「無明」
 の痼疾(くじく)「久しくなならない病氣・持病」を癒
 して下さる如来(仏の尊称)である
 という。(広辞苑「薬師如来」参照)
 ・用明天皇は、用明元年(五八六年)「大身」
 (大御身)「欽明」上皇の病氣平癒を願って、
 「薬師如来像」の作成、および「大倭国・肥
 後国」の「法隆寺」建設を思い立たれたので

一切の生物
 病氣のちから
 一切の迷妄・煩惱

おきいた 323P
おきいた 323P

3.615P-1/7

紀下558

慌 1 29P 完工 489P

3602P

3514-3/2 1-2行

元興寺に建立
推古四年（五九六）十一月に、
国の法興寺に完成し、我が子善徳が
仕え、てゐることは、蘇我馬子にとつて計り
知れない無上の喜びとするところであつた。
また、大倭国では、法隆寺の金堂や五
重塔などの完成（推古十五年）を目差して
慌しい建設作業が進められていた。
一方、推古元年（五九三）に難波（荒陵）
は玉造に造り始められた四天王寺にも、
もうだい／＼と、その姿を現わしてゐたことであ
つたろうか。
そんな時、東の日の日本国（天智）において三空の
興隆にとめる蘇我馬子は、元興寺を造り
大和国に、飛鳥寺（元興寺）を造り
たいし
と思ひ至つた。
そして、等子刀弥々大王が退位された直後
の推古十三年（六四五）四月一日、大和国飛鳥に、元
興寺に建立されることとなつたのであろう。

（巻頭の第10表参照）

紀F186 版③3875 (同文)
③3516-1/3 (同文)

3,615^P-2/7

3516^P 1/3 版
仏工 = 仏師 57^P

③3516^P-1/3 同文

③3615^P-4/5 15^斤

十三年(六〇五)四月一日
大倭国の法興寺に推古四年
(五九六)に落成してから九年後の推古
推古天皇は、銅の大六の佛像一軀を造るよ
うにこの当時の第一級の仏工、鞍作島止
利仏師にお命になつた。(第六十八章
へ「法興寺」と「元興寺」の項において既述
・推古紀十三年(六〇五)四月一日条には、
こう記されてゐる。
天皇、皇太子・大臣及び諸王・諸臣に詔
して、共に同じく誓願ふことを發つて、始め
て銅・續の大六の佛像、各一軀を造る。乃ち
鞍作島に命せて、佛造りまつる工とす。是
の時に、高麗國の大興王、日本國の天皇、佛
像を造りたまふと聞きて、黄金三百兩を貢上
る。
あるいは、次のような意味であつたらうか。
天皇(推古天皇)は、皇太子(聖德太子)。

たぐいす 1363 光緒 3605
出典 1523

三〇史記(2) 178頁
3.615 - 3/7

花塚 1810
3516 - 1/1

紀下 186 注7に 大興王とある
3875 同文

の丈六の佛像(飛鳥大仏)

大臣(蘇我馬子大臣)乃び諸王・諸臣に詔さ

水、共に同じく誓願ふことを発て、始めて

銅・練の丈六の佛像、各一軀を造る。乃ち鞍

作鳥に命せて、佛造りまつる工とす。是の時

に、高麗國の大興王、日本國の天皇(大倭國

(九州)と日辺日本國(近畿)とを合せて一

朝の世となつた後の日本國の天皇、推古

天皇、佛像(大和國元興寺の飛鳥大仏

の)とてあろうを造りたまふと聞きて、黄

金三百兩を貢上る

隋の煬帝の在位は六四年、六八年である煬帝を恐れ

た高麗國の大興王は日本國との連係を望んだものと思われ

た日本書紀(日本書紀)に日本書紀(日本書紀)に日本書紀(日本書紀)

な、お、に、よ、つ、て、作、ら、れ、た、

へ鞍作鳥が作った法隆寺の本尊(薬師如来

像)の出来はえが、驚くばかりに美しく、立

派だったからこそ、その評判は以前にもま

で高くなり、鞍作鳥は、更に大和國

の元興寺の本尊(飛鳥大仏)を作るように要

請されたのであろう(写真図版)

と思われ、(第44図)飛鳥大仏搬入の指揮を

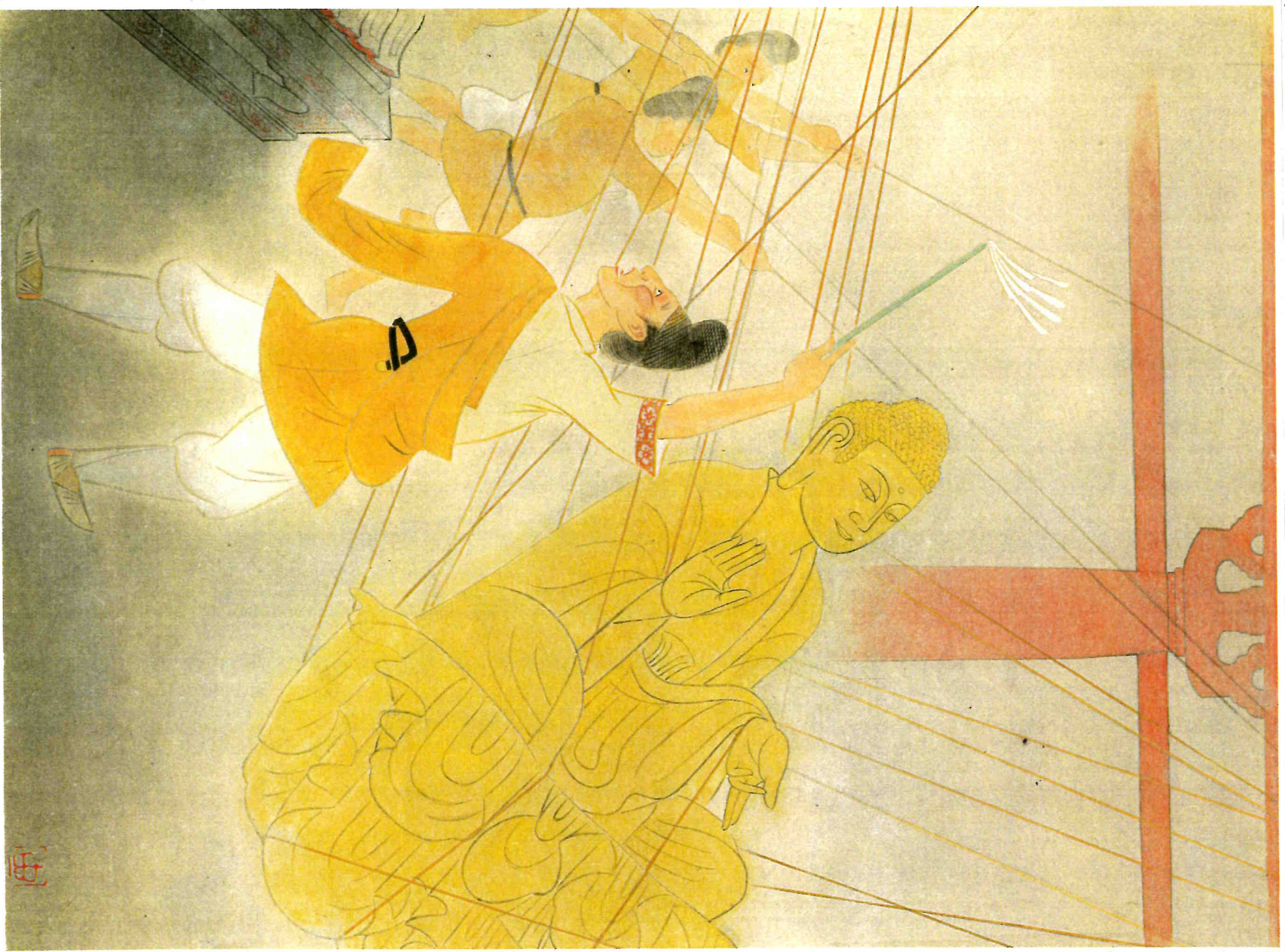
する止利仙師(参照)

・カラー
・右頁に
配置し
下さい。
・てぎょだけ
大々載せ
たい。

・明く、
鮮明に
お願ひ
します。

3,615^p-4/7

・飛鳥大仏
3517^p-2/5



1369 飛鳥大仏
1469 飛鳥大仏
第443回 飛鳥大仏搬入の指揮をする止利仏師

『安田毅彦』山巨匠の日本画「^{あすか}」^{（たにきう）}、学習研究社、1994年7月10発行、28頁参照
4. 飛鳥大仏は、金堂の戸より高い飛鳥大仏を、戸を壊すことなく堂内に納れたという（推古
紀14年4月条参照。）

③3604-2/12 ③3614-2/4 12/12
③3614-2/115 金堂など未完

せんめんえ 鞍 1273

③3615-2/52 3,615-5/7

③3614-2/2 8/11 ~
③3616-1/5
③3616-5/5

(二)

なるほど、

四月一日

へ鞍作鳥は、推古十三年以降の同時期に、

葉師如来像と日飛鳥大仏との両方を手

かけていた。

と、解すことも出来よう。

一か、大六佛である。日飛鳥大仏は、あ

まか、四年間の短期間で完成していることに

う、推古十三年に日飛鳥大仏製作の命が下

った時点においては、すでに日葉師如来像の

かほとんと完了していたので、鞍作鳥

は、ただちに日飛鳥大仏の作成にとりかか

って、その作業に専念することになった。

ろう

と想像される。

なお、推古十三年(六〇五)頃、大倭国(肥後国)

の法隆寺の本尊、日葉師如来像は、かほほ出来

あがっていたにせよ、その時、金堂・五

重塔などは建設途中だったのであろうと思われ

また、予め述べると、(六〇六)

法隆寺の金堂が完工した推古十四年四月八

第七十章 西の法隆寺、東の斑鳩寺の項末尾におき、既述

3.615^P-6/7

3605^P銘文
2302^P銘文

天宮改行
第5表用眼式

日の花祭の日には、とりあえず、口薬師如来
像を金堂内に安置したのである。と題像
式が行われた。薬師如来像光背銘
・そして、翌年の推古十五年に、法隆寺の開
・生後一周間ぐらゐで明暗がわかる程度。
・色は二、三ヶ月めごろから分かるようにな
り、四ヶ月ぐらゐになると、はつきりした色
をいっと思えるようになる。
・二ヶ月以上先が見えるのは、およそ四ヶ月以
後からである。そのころまでは、ほとんどの
赤ちゃんにヤブニラミ（斜視）があるものの
次第になおる。
という。へ「家庭の医学」柳下徳雄、小学館
六八五頁参照）
すなわち、生まれてすぐの人間の子はいま

誕生会（たんじょうえん）の日

本尊薬師如来像

月文
③3895

奈良の大仏 6P
続紀(録)3
119P

3,615P - 7/9

続紀(録)3 奈良の大仏 6P 電 開眼供養

あ7994P 小180
「奈良の大仏」6P 下

(こ)

かんがえ
満仏会

た目で物を見ることが出来ない。
そこで我が国の往古の人々は、
四月八日の花祭の日、
仏像を寺院内に
安置し、
（新迦の誕生日）
四月一日から一年くらい後に
開眼式（開眼
会）を開眼供養）を行なった、
と思われろ。
例えは、奈良東大寺の大仏（奈良の大仏）
は、
（F）
文献には記されていらないものの、
天平勝宝三年（七五一）四月八日の花祭の日に
誕生会が行なわれ、
翌天平勝宝四年（七五二）四月九日に
式が行なわれたのであろう。
と推察される。
*

(注意！)
「錆の丈夫」は
製作が加作、右の
てなり。

推古十三年(六四五)四月一日に

3.616^{P-2/5} 3516^{P-1/2} 3527^{P-8}
 3.616^{P-2/5} 3516^{P-1/2} 3527^{P-8}
 3.616^{P-2/5} 3516^{P-1/2} 3527^{P-8}

興寺に建立の項において既述

■それでは何故、

へ元興寺の日銅の（丈六の）佛像が完成

した時期について、日本書紀の記述と、飛鳥

大仏の銘文とが、こんなにも（三年間も）食

い違っているのだろうか

と疑問に思われる。

■また、さらに述べると、

丈六の仏像日飛鳥大仏の構想を練り、

鑄型を作り、鑄造し、外観を整え、鍍金を

行うという作業を、――推古紀十三、十四

年条に記されているように、わずか一年間と

いう短期間で終えることが、本当に出来得た

のであろうか

と疑がわれる。

■なお、町田甲一氏は、飛鳥大仏銘の通り

に、飛鳥大仏は推古十七年に金堂に安置

されたのであろう

という。へ法隆寺に町田甲一、時事通信社

三四、三五頁。同六七頁参照

（＊）